

留学決定に至るまでの経緯

2025年6月20日 鈴木理沙

はじめに

私は、2025年3月に早稲田大学 基幹理工学研究科 情報理工・情報通信専攻にて、修士課程を修了し、同年9月からスイス連邦工科大学ローザンヌ校 ([EPFL](#)) コンピュータサイエンス専攻の博士課程に進学します。修士では、無線通信やそれに関わるデジタル信号処理技術について、博士では、ネットワークの中立性や透明性について研究します。

幼い頃から、なんとなく将来は海外で働きたいかもな〜と、漠然とした憧れがありました。しかし、小中高大を日本で過ごし、気づけば大人になっていて、英語ペラペラの帰国子女の友人が外交官になり、ああ、私にはもう遅いなと諦めました。修士1年の6月頃、就活始めようかな〜大変そうだな〜とぐずぐずしていたとき、アメリカで博士号を取得した方の記事に出会いました。私は、よく考えたら修士の研究生活はとても楽しいし、海外でこの生活ができれば最高では？と思い、急激に惹かれていきました。一度かっこいい！と思ったら無視できない質です。就活を無視して海外博士の情報収集を始めましたが、普通とは異なる進路選択をすることに、怯むこともありました。そんなとき、本サイトに出会い、多くの奨学生の経験を読み漁り、勇気づけられ、焚き付けられました。今度はこの報告書が、あなたの力になれることを願っています。とは言え、私の経験だけをなぞるのは、あまりに危険です。海外博士課程への進学には、一般化するのとは不可能だと言えるほど、人には人の道があるからです。できるだけ多様な経験を知り、自分だけの道を拓いてください。

準備

私は、コンピュータサイエンスならアメリカだろうということで、アメリカの大学に向けて準備を始め、ほぼ同じ内容で出願できるスイスの大学 (ETHとEPFL) にも出願しました。出願時の研究経験や実績などのデータは、[当時のCV](#)を参照してください。以下、個人的に重要だと思う方から書きます。

推薦状

お願いした方: 修士の指導教員、研究インターン先のR教授、S教授

私は、[山口尚人さんの記事](#)を読み、志望先で研究インターンがしたいと思ったので、複数のPIにメールを送りました。返信が来たらラッキーというのは理解していましたが、全然来なくて超へこみました。唯一、UC BerkeleyのR教授が興味をもってくださり、この実装ができればプロジェクトに参加してみる？と課題を出してくれました。ここまで来たらやるしかないので、修士1年の2〜3月は、昼間は修士の研究、夜は課題、と必死でした。その後、課題がクリアできたので、プロジェクトに入り、リモートと現地で研究をさせてもらえることになりました。特に現地で研究した期間は、先生や学生、設備など全てがトップレベルの環境で、毎日わくわくしました。そして、R教授と、プロジェクトのコアアドバイザーだったS教授のお二人に推薦状をお願いしました。ここで知り合ったラボメイトに出願書類の推敲をサポートしてもらえたことも心強かったです。R教授とS教授はネットワーク分野で非常に有名な先生方で、私の受験において、推薦状が合格の決め手だったと勝手に想像しています。お二人が私の必死さを買ってくださったことは感謝してもしきれません。さらに、プロジェクトが無線通信の知識があるメンバーを必要としていたことも幸運でした。

人任せな発言で先生方には申し訳ありませんが、PIにメールを送ることで、私たち学生側にダメージはありません。はじめは返信が来なくて悲しくはなりますが、それも慣れます。メールを送り、オンラインミーティングを依頼し、プロジェクトへの参加や共同研究ができないか働きかける。日本では図々しいと言われるくらい積極的に動いてちょうどいいと思います。

研究経験と実績

最低限、国際会議での主著論文が1本は必要だと聞いたことがあります。私は、トップカンファの出版歴がなかったので、あまり強い実績ではなかったはずです。そのため、どれも私が単独で行ったプロジェクトの主著論文であることをSoPでアピールしました。

奨学金

大変ありがたいことに、船井情報科学振興財団とKDDI財団から採択いただき、併給を認めていただきました。応募した財団と結果は下表の通りです。

財団名	書類選考	面接
船井情報科学振興財団	通過	採択
KDDI財団	通過	採択 (書類選考のみ)
吉田育英会	通過	不採択
村田海外留学奨学会	不採択	-
中島記念国際交流財団	通過	不採択

出願準備を進めていけば、奨学金の準備にも自然と繋がると思います。私が奨学金について特別に行ったのは、各財団について、応募要項やHP、財団の理念などを読み込むことです。求められている人物像は財団によって異なるので、それに合わせて書類の内容を調整しました。

SoP

私は、XPlaneのメンターとUC Berkeleyで関わったラボメイトに添削していただきました。なぜそのテーマを選んだか、課題は何だったか、なぜその方法で解決したか、なぜPhDをやりたいかなど、CVに示される研究経験と実績に至ったストーリーを書きました。一人で書ききるのは難しいので、XPlaneのメンター制度を使ったり知り合いに頼んだりして、経験者に繰り返し添削をしてもらおうと良いと思います。

英語 (TOEFL)

最終スコア: 97 / R 28, L 25, S 23, W 21 (2024年8月)

Mybest: 102 / R 28, L 27, S 23, W 24 (2024年10月)

100を目指していましたが、MIT以外の志望校の条件がクリアできたので、ここで諦めました。主に、TOEFLテスト英単語3800と公式過去問集を使って勉強しました。足切りにしか使われないと聞くので、早く100を取るのが良いです。自戒の言葉です。

GPA

学部の平均: 3.37、修士の平均: 3.78

足切りにしか使われないと聞きます。平均より専門科目のGPAが重視されているという噂や、基準点より低くても推薦状が強ければ合格するという噂もあります。既に取得した単位のGPAは変えられないですし、未来のGPAは全て4にしようと決めて、あまり気にせず研究をするのが良いと思います。

受験

出願校の選定

研究インターンの経緯から、第一志望はUC Berkeleyでした。その他の出願校の選定は、色々な人に聞いたり、[CSRankings](#)で調べたりしました。結局、R教授とS教授に勧めていただいた大学とPI、計15校に出願しました。一般的に、出願数は5~8校くらいの印象ですが、私は、気合でどうにかなるだろうと手続きを始めました。出願数に関して、人それぞれの戦略がありますが、個人的には、これだけ多くの大学に出願して良かったと思います。出願時と合格後で、大学、PI、ラボに対する見方が大きく変わったからです。合格をいただいた大学は、憧れの研究機関から毎日働く職場へと変化し、魅力的に感じる点も変わりました。時間とお金が許す限り、出願校はオープンマインドで選ぶのがいいかでしょう。

ラストスパート

船井財団に採択していただいたおかげで、出願まで加速度マックスで進みました。加藤先生には、推薦状の下書きの添削で大変お世話になりました。先生方や先輩方に、疑問点や不安要素などを何でも気軽に相談できる環境があり、支えていただきました。同期とは、Personal Statementなどを添削しあい、進捗状況を共有しました。特に、栗原さんと伊東さんは、毎日進捗を報告しあって、先延ばし癖のある私のけつを何度も叩いてくれました。皆さまのおかげで出願が完遂できました。ありがとうございました。

結果

受験結果は、下表の通りです。

大学	直前メールへの返事	面接	結果
Stanford	○	無し	不合格
UC Berkeley	-	無し	不合格
CMU	△	無し	不合格
ETH	×	無し	不合格
UW	△	無し	不合格
Princeton	×	無し	不合格

Harvard	×	有り	不合格
U Michigan	○	無し	不合格
Virginia Tech	-	無し	合格
UIUC	×	有り	合格
Cornell	×	無し	合格
UT Austin	○	有り	合格
USC	○	有り	合格
EPFL	×	有り	合格
UCSD (CS, ECE)	○	無し	合格 (ECE)

直前メールについて

インターンで既に関係性があったUC BerkeleyとVirginia TechのPI以外には、11月末にあなたのラボに出願する予定という旨のメールを送りました。

○:「正式な出願サイトに出願してね。もし良い内容だったら確認するよ。」

△:「今年は生徒を募集していないよ。」

×: 返事無し。

UCSDは、直前メールの返事で、PIからCSとECEの両プログラムから出願しておくように勧められたので、そのようにしました。

面接

PIによって面接方法は異なりました。事前に論文を何本か送ってくださって、「どれか読んでおいて、それについて面接で聞くからね。」という方もいれば、「あなたの研究経験を詳しく聞かせて。」という方もいました。私は、研究経験と実績を4,5枚のスライドにまとめて、後者のパターンの場合はそのスライドを使って説明しました。スタイルは違えど、PIと本当に研究の興味が合うか、自分が取り組んできた研究について明解に説明できるか、の2点を見られていると感じました。

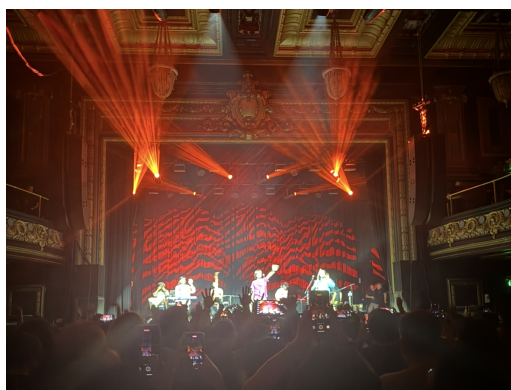
進学先の選択

大変ありがたいことに、複数の合格をいただけたうえ、第一志望のUC Berkeleyは不合格だったため、進学先を決めるのに非常に悩みました。進学先の決定に大きく影響したのは、合格者が招待されるVisit dayというイベントです。私は、UCSD, USC, EPFLは対面で、その他はオンラインで参加しました。UT Austinは、イベントの日程が離れていたため、UCSDとUSCのイベント後に、個人的に訪問しました。その他の大学は、スケジュールの都合がつかず、断念しました。基本的に、交通費（飛行機代含む）や宿泊費は大学が負担してくれるので、できるだけ多くの大学に訪問するのが良いと思います。イベントの参加以外にも、PIとミーティングをして研究テーマの理解を深めたり、学生にラボの実情を聞いたりしました。それ以外にも、PIの指導スタイル、学生の働き方、住環境など、あらゆる要素を総合的に判断して、EPFLへの進学を決めました。

終わりに

私が海外博士を目指して本当に良かったと思う理由の一つは、船井財団に出会えたことです。船井財団で、評議員の先生方から卒業生、博士課程中の先輩、同期まで、幅広い世代で、海外博士という同じ夢に向かった or 向かっている人に出会いました。初めての交流会で感じた、研究に対する高い熱量、悩みが共有できる安心感、そして留学を絶対に実現したいと身が引き締まる感覚、今でも忘れられません。誰もが、努力を惜しまず、悔しさをばねに研鑽を続け、その頑張りをひけらかさない人格者です。私は、そんな船井財団の皆さまを心から尊敬していますし、その一員になれたことを大変光栄に思います。そして、いつでもできるだけ近い位置に肩を並べられるよう、頑張ろうと奮い立たされます。あなたも、ぜひ船井財団に応募してください。一緒に留学しましょう♪ 質問・相談がある方は、いつでもメールお待ちしております。アドレス: waselisa09@ruri.waseda.jp

最後に、留学決定に至るまでにご支援いただいた全ての皆さまへ、この場をお借りして深く感謝申し上げます。指導して下さった研究者の皆さま、出願に向けてアドバイス・サポートをくださった皆さま、いつでも応援してくれた友人、支えてくれた家族、本当に本当にありがとうございました。今後も一生懸命頑張りますので、応援よろしくお願いいたします！



日本のバンドLampのライブ



アメフト Berkeley 対 Miami の試合



自動運転車WAYMO

研究インターン中の思い出たち